2009年度

修士論文梗概

（演習科目　ヨーロッパ文化学A演習）

（指導教員　金子 晴勇教授）

ルターの神学的逆説の研究

—ハイデルベルク討論で展開された関係概念・神認識・愛—

聖学院大学大学院

アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科

ヨーロッパ文化学専攻（博士前期課程）

学籍番号 108MC001　　名前　小川 順

ルターの神学的逆説の研究

——『ハイデルベルク討論』で展開された関係概念・神認識・愛

概要

マルチン・ルターは1518年5月に、みずからの属するアウグスティヌス派修道院の定期総会の公開討論で「神学的逆説」（theologica paradoxa）という命題を発表した。しかしながら「なぜ、ルターは神学的逆説を説いたのか」。本論文ではこのことを問題提起している。

ルターの本討論の命題は、神と人との関係における律法・義認・自由意志の問題から罪・死・義・生・恩寵などを明らかにした。また、神の認識については「栄光の神学」と「十字架の神学」との相反する啓示概念を提起し、愛については「人間の愛」と「神の愛」との矛盾を語って、罪人に向かう「十字架の愛」を示した。

本論文の「第Ⅰ章 神と人との関係の逆説」では、ルター神学において示される「律法」と「恩寵」の区別と順序について考察した。その際、律法は人間に罪を認識させて死へと導くが、ルターはこの律法のわざを「神の他なるわざ」と呼んでいる。しかしながら、恩寵は罪と死を媒介に、人間に対して希望と憐れみをもたらす。ルターはこれを「神の本来のわざ」と呼んだ。このように律法によって無とされたところに、ルターは恩寵を信じる場所を提示している。

ルターの中心思想の義認については『ローマ書講義』と宗教改革的転回である「塔の体験」の出来事を照らし合わせながら、神の前と人々の前における義認の相違について論究した。その際、ルターの義認思想から浮き彫りとなった「義人であって同時に罪人である」という逆説は、罪人にもかかわらず、キリストの義によって義人であるという人間理解を示している。そのため、このような逆説は、神の前において罪を認識するところに、神の義によって義とされる信仰の場所を論じることになる。

次に、ルターは自由意志についてハイデルベルク討論の第13命題で「自由意志は、堕罪後には単なる名目からなる事物にすぎず、自己にあるかぎりをなしても、死に至る罪を犯す」といっている。なぜなら、ルターによれば、人間の意志は自己のものを求める「自己追求」に帰結するため、自己にあるかぎりをなす間は罪を犯すという。このように自己に

あるかぎりをなしも、人は恩寵を得ることができない。むしろ、それは罪を犯す可能性でしかない。しかしながら、ルターは自由意志による救済の可能性を否定することによって、キリストに希望を置き換える悔い改めの場所を導きだした。

本論文の「第Ⅱ章 神認識についての逆説」では、『ハイデルベルク討論』の中心である第19・20命題について論究した。両者の命題で提起された「栄光の神学」と「十字架の神学」との全くの相反する啓示概念は、自己の知恵とわざによって「神の神性・力・善・義」を認識しようとする「栄光の神学」と「神の人性・弱さ・愚かさ」を認識する「十字架の神学」との対概念になっている。ルターによれば、神は「神性・力・善・義」を隠し、「人性・弱さ・愚かさ」という反対の相のもとに啓示される。したがって、十字架によって啓示された神は、隠された神である。これは逆説である。しかしながら、ルターはこのような十字架のもとに、神を認識する信仰の場所を示した。

このように十字架によって啓示された「隠された神」は、信仰によって認識されながらも、ルターは信仰によっても認識することのできない「荘厳のうちに隠された神」についても論じている。ルターによれば「荘厳のうちに隠された神」は「罪人の死を悲しまず、罪を取り去ろうとしない」。しかしながら、神の言によって「啓示された神」は「罪人の死を悲しみ、罪を取り除こうとされている」という。そのため、両者の同一性を説くと、理性の判断では背理である。しかしながら、それにもかかわらず、ルターは「啓示された神」と「荘厳のうちに隠された神」とは同一の神であるという。ルターによれば「その場合、それが同一であることを説明できないなら、……信仰に駆り立てる場所が存在することになる」（WA.18,633,20ff.）という。

最後に、本論文の「第Ⅲ章 神の愛についての逆説」では「神の愛はその愛するものを見つけるのではなく、創造する。人間の愛はその愛するものによって生じる」というハイデルベルク討論の神学命題の最終命題について検討した。ルターによれば、人間の愛は対象が愛の原因であり、自己の愛好するものを求める。それに対し、神の愛は無なるものや貧しく困窮するものに向かって善なるものを授けるという。そのため『キリスト者の自由』で叙述される「貧しく軽蔑された悪い娼婦」＜罪人＞と「豊かな高貴な義しい花婿」＜キリスト＞との矛盾関係を成立させている。このようにキリストと罪人との相反関係には、恩寵によって信じる場所（霊性）を見いだすことができる。

結論では、ルターが神学的逆説を説いたのは、上記のように信仰の出来事の場所を示すためである、と結論づけた。

聖学院大学大学院

アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科

ヨーロッパ文化学専攻（博士前期課程）

学籍番号 108MC001　　名前　小川 順